

[1 1] 東臼杵地区小体連

(学校数 13校 児童数 1,291人)

I 年間事業

期 日	内 容	会 場
6月15日(木)	第1回東臼杵地区小体連理事会・評議員会	諸塚村中央公民館
7月	美郷町水泳記録会	各学校で実施
7月13日(木)	椎葉村合同水泳記録会	椎葉小学校プール
10月26日(木)	椎葉村小学校陸上大会	椎葉村総合運動公園
11月21日(金)	諸塚村持久走大会	各学校で実施
11月27日(月)	東臼杵地区小体連授業研究会 ○研究授業 美郷北義務教育学校 第5・6学年 単元：ハンドテニス(ネット型) 授業者：小玉 純也教諭 ○事後研究会 ○研究のまとめとその方向性検討	美郷町立美郷北義務教育 学校
11月28日(火)	門川町小学校陸上記録会	門川町海浜総合公園
2月下旬～3月上旬	第2回東臼杵地区小体連理事会・評議員会	諸塚村役場

※ その他、各町村で体育主任会を実施している。

II 事業部のあゆみ

1 水泳記録会

【出 場 者】 諸塚村、美郷町・・・5・6年児童(計103名)

【実施種目】 25m(自由形、平泳ぎ) 50m(自由形、平泳ぎ)

2 陸上大会・記録会

【出 場 者】 門川町6年児童、椎葉村5・6年児童、諸塚村5・6年児童 (計211名)

【実施種目】 100m走 女子600m走 女子800m走 男子1000m走
50mハードル走 男女混合400mリレー 男女別400mリレー
走り幅跳び 走り高跳び ソフトボール投げ

※ 地区によって実施しない種目あり

Ⅲ 研究部のあゆみ

1 研究主題・副題

生涯にわたって心身の健康を保持増進し、
豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の基礎を育む体育科学習
～ボール運動における対話的で深い学びのある授業の創造と展開～

2 主題設定の理由

東臼杵地区は、門川町、諸塚村、椎葉村、美郷町の4つの小学校体育連盟が集まって構成されている。東臼杵地区小体連の実態は様々ではあるが、多くの学校が小規模校であり、自然に囲まれ、児童は温かい人間関係の中で育ってきている。一方で、近くに公園や運動施設がなかったり、バスや車での登下校により日常的に運動不足に陥ったりしている児童も多い。児童数の減少とともに、学習形態の工夫も考えていく必要がある。また、スポーツ少年団等の放課後の活動も各校でばらつきが見られ、特にスポーツ少年団のない山間地域の小学校では、学校以外で運動をする機会がほとんどないのが実情である。そのため、児童間で運動の二極化が進んでいる地区もあり、運動の機会が極端に少ないまま大人になってしまう可能性もある。人間形成を図る上で重要な時期である小学校段階において、運動に親しむ資質や能力の基礎を形成することは、生涯にわたってスポーツに親しみ、健康な生活を送る上で大変重要である。

そこで、研究主題を「生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育む体育科学習」とし、4つの町村それぞれの地区・小学校で児童や学校、地域の実態に応じて副題を設定し、研究に取り組むことにした。

特に本地区では、これまでの各地区・各学校での取組を継続させながら、児童がより主体的に運動に関わり、対話的で深い学びのある授業を実現するための具体的な手立てを講じることができれば、健やかな心と体を育み、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることにつながるのではないかと考えた。

3 研究目標

児童に運動の楽しさを実感させ、豊かなスポーツライフを実現するための資質や能力の基礎を育む体育科学習の在り方を究明する。

4 研究の仮説

- (1) 学習指導過程や場の設定など、児童が進んで運動に取り組めるような工夫をすることで、児童が主体的に運動にかかわり、対話的な学習を実現することができるであろう。
- (2) 児童の課題解決につながる学習活動を取り入れることで、児童の運動に関する知識・技能や思考・判断・表現力を高め、深い学びを実現することができるであろう。

5 研究の内容

- (1) 対話的な学習をするための手立て
 - ★ 学習過程（単元指導計画）の工夫
 - ・ 視点の共有
- (2) 深い学びを実現させるための手立て
 - ★ 課題解決につながる学習活動
 - ・ 教具の工夫

※「6 研究の実際」には、紙面の都合上、
★印の内容に絞って掲載

6 研究の実際

令和5年11月27日（月）に授業研究会を実施し、研究の仮説検証を行った。

領域	単元名	学年	授業者
ボール運動	ネット型「ハンドテニス」	第5・6学年	美郷北義務教育学校：小玉 純也 教諭

(1) 対話的な学習をするための手立て

児童が対話的な学習をするためには、児童自身が学習の流れを把握して目標を明確にし、その目標に向かって主体的に学習に取り組むことが大切である。そこで、本研究では、単元の学習過程及び1単位時間の学習指導過程を以下のように設定し、児童同士が活動の中で積極的に対話を重ねることができるようにした。

- 単元の学習課程…オリエンテーション（学習の見通しをもつ）
→「ねらい1」（知識・技能の習得）→「ねらい2」（個に応じた作戦を考える）
- 1単位時間の学習指導過程…課題把握・作戦を立てる時間→ゲーム①→振り返り（作戦）→ゲーム②

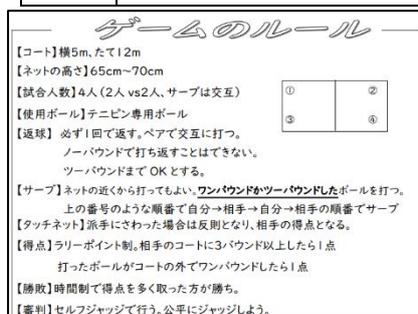
時間	1	2	3	4	5	6	7(本時)	8		
0	オリエンテーション 1 学習の見通しをもつ。 ○テニスのゲームの映像を見る。 ○単元計画表を使って学習の見通しをもつ。 ○1時間の流れをつかむ。	1 場づくり 2 本時の学習内容を確認する。 ○みんなの課題・学習内容・運動のポイントを知る。 ○作戦を立てる。	ねらい1 ゲームを楽しみながら、基礎的な技能を身に付けよう。			ねらい2 ゲームを楽しみながら、得点できるようになる。				
10	2 学習の進め方を確認する。 ○準備の仕方 ○作戦の立て方・振り返りの仕方 ○学習の約束	3 準備運動・感覚づくりの運動を行う。 ○素振り ○壁打ち ○トス打ち	運動量確保のため2人×7チーム編成とし、4コート設定する。					3 準備運動・基礎感覚を高める運動をする。【素振り、かべ打ち、トス打ち、ミニラリー（第3時以降）】	総当たり戦	
20			試しのゲーム	上手なボールの打ち方 4 ラケットのどこで、どうやって打つとよいかについて考えながらゲームをする。	ボールを打ち返す 4 相手にボールを打ち返すことについて考えながらゲームをする。	得点をとる 4 得点の決め方について考えながらゲームをする。	チームの特徴を知り、作戦を立てる。 4 チームでの作戦を考えながらゲーム①をする。			4 チームでの作戦を考えながらゲーム①をする。
30			かべ当てゲーム	1対1のラリーゲーム	4ラリーからのゲーム	対抗戦	対抗戦			
40	3 学習のまとめをする。 ラケットの真ん中で体を回転して打つ	○ゲームの振り返りをする。 ・課題 ・ルール	5 ゲーム①の振り返りをする。 6 よい動きやポイントをみんなて確認する。 ・動きの共通理解 ・練習	5 ゲーム①の振り返りをする。 6 よい動きやポイントをみんなて確認する。 ・動きの共通理解 ・練習	5 ゲーム①の振り返りをする。 6 よい動きやポイントをみんなて確認する。 ・動きの共通理解 ・練習	5 ゲーム①の振り返りをする。 6 スキルアップを行う。 チームの課題に応じて	5 ゲーム①の振り返りをする。 6 スキルアップを行う。 チームの課題に応じて			
評価	知・技・態		①	②	②	③	②③			
準備物	学習カード	学習カード、学習資料	学習カード、学習資料	学習カード、学習資料	学習カード、学習資料	学習カード、学習資料	学習カード、学習資料	学習カード、学習資料		

(2) 深い学びを実現させるための手立て

児童が深い学びを実現するためには、1人1人が運動の基本的な知識・技能をしっかりと身に付け、学んだことを元に練習をしたりゲームをしたりしていく必要がある。そこで、練習方法を細分化し、スモールステップで学習を進めていくことで、運動が苦手な児童も段階的に知識・技能を習得していくことができるようにした。また、ゲームを振り返り、作戦を立てるときに作戦ボードを使用して視覚的に情報を共有することで、児童同士で課題を把握したりお互いの意見を取り入れたりして、学びを深めることができるようにした。更に、児童が作戦を立てる際の手助けとして、作戦カードも活用した。

【スモールステップによる練習内容】

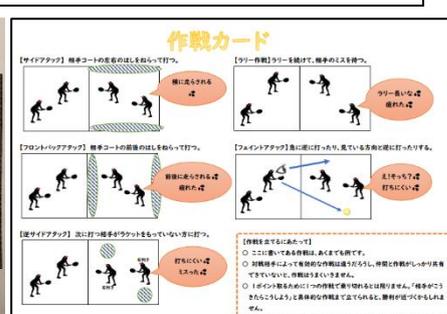
段階	内容
1	壁打ちやラリーゲームを通して、ラケットのどこで、どのように打つとよいか考える。
2	ラリーゲームを通して、どういう球が取りやすいか考える。
3	ラリーゲームを通して、ラリーを続けるにはどのように動けばよいか考える。
4	練習ゲームを通して、どこに打てば得点が取れるか考える。
5	練習ゲームを通して、自分たちのペアにあった作戦を考えて実行する。



【図1 ゲームのルール】



【図2 作戦ボード】



【図3 作戦カード】

7 研究の成果 (○) と課題 (●)

- 単元の見通しをもたせたり、課題把握や振り返りをする時間をとったりしたことで、児童が主体的に学習に参加し、チームに合った作戦を考えることができた。
- 得点につながる動きを単元前半で理解させたことで、単元後半に具体的な作戦を話し合うことができるようになった。
- スモールステップで練習を進めたことで、運動が苦手な児童も基本的な技能を習得していくことができ、ラリーを続けて楽しむ姿が見られた。
- 作戦カードを見ながら作戦ボードを使用してチームで作戦を立てることで、チームのよさや課題を互いに理解し、得点につながる動きについての学びを深めていくことができた。
- 改善点や作戦を話し合うことはできていたが、実際のゲームになると、楽しさが勝ってしまい、改善点や作戦を忘れていた児童もいた。自分たちの考えたことをゲーム中にも思い出させる工夫や声掛けが必要だった。
- 対話が主にチーム内の児童同士となってしまったため、教師対児童や全体での振り返りを通して、更に対話を広げる必要があると感じた。



【児童の話合いの様子】

IV まとめ

研究授業会を通して、「対話的で深い学び」とは何か、具体的な取組を元に話し合ったことで、児童が主体的・意欲的に運動に取り組むことができるようにすることや、基本的な動きを身に付けることができるようにすることの大切さについての共通理解ができた。ボールゲームはチームスポーツだが、チーム内だけでなく全体で作戦の共有をしたり、運動のコツを伝え合ったりすることがより深い学びにつながるのではないかと考えた。児童が知識・技能を身に付け、思考・判断・表現していくことができるように、次年度以降も対話的で深い学びのある授業づくりについて、研究を進めていきたい。